

科学カフェ京都  
(2009年10月10日)

理系のための歴史  
—アジアの海から見直す日本—

桃木至朗  
(大阪大学文学研究科)

# I 歴史学と歴史教育の現在

# 1. 高度な発展

- グローバル化とIT化による学問・教育の進歩。
  - 世界の変動に対応した新しい視点や領域の出現
  - (例) 東南アジア、アフリカやオセアニアの歴史、海から見た歴史、女性から見た歴史、環境と災害、病気の歴史、衣食住の歴史...
- ★日本の歴史研究は、きめ細かさで世界の全域について専門家を擁する点で世界一。歴史教育も全世界の歴史を教えようとする点に特徴

## 2. しかし制度疲労と深刻な危機

(歴史だけに限ったことではないが)

- 「暗記ばかり」「現代社会の役に立たない」歴史学習の拒否と、アメリカ型の非歴史主義的思考の一般化
- 極端な政治的歴史観の流行
- 社会・論壇における「歴史家」の発言力と、「大河ドラマ」「時代劇」的共通知識の消失

# 原因(1): 歴史をとらえる視角

- 明治以来の、「脱亜入欧」に必要な、成人男性の教養。
- 第二次大戦後の *観念的な* 進歩主義・平和主義 (欧米モデルによる近代化をもっと徹底しようという思想)。

*\* どちらもアジアや「女子供」は視野の外!*

## 原因(2): 学ぶべき歴史のイメージ

- 各国家・民族がセパレートコースで競争し、「進んだ」「遅れた」の差ができる歴史。
  - 各時代の最先端、最高峰、メジャーなものだけの歴史(とくに文化史)。
- \* 歴史を学ぶ子どもたちに対しても、「競争に勝って一流になれ、そうならない者には価値がない」というメッセージ?**

# 原因(3): 日本社会の欠点

- 細かいところばかりこだわって全体を見ない→「歴史学の方法や現状を主要下位領域に区分して解説し、通読すれば歴史学の全体像がわかるようにした入門書」が作れない。
- 横並びの発想が強く、みんなとちがったことができない。みんながやってることはやめられない。
- 自分の属する集団の外部に向けて自分の知識や考えを説明したり、外部の人間と討論する能力がきわめて低い(←「日本語は論理的でないが自然の描写や感情表現に優れる」などという19世紀的理解を引きずった、国語教育の深刻な欠陥)。

# 原因(4): 大学・高校の保守性と 学習指導要領の失敗

- 「入試が変わらない」「教科書はわけがわからなくなる一方」の背後にある大学(とくに人文系)・高校の保守性と研究者・教員の視野の狭さ。歴史学と教育学(地歴科教育法)の間のカベ[歴史学は「専門性」から出られず、教育学は歴史教育の抽象的理念と単元・時間ごとの授業実践の方法に終始]
- 学問の進歩と世界の動きから見れば評価すべき現行学習指導要領と教科書の新しい内容が、条件整備を欠いたために現場ではうまく教えられない→内容を「元に戻す」ことが自殺行為だとすればどうすべきか？



# 対策例：阪大史学の挑戦

- シルクロード史(中央ユーラシア史)、東南アジア・海域アジア史、近現代のグローバルヒストリー(国ごとの歴史の寄せ集めでない世界史の全体像を研究する)など **世界を広く見渡す歴史研究**。
- 古代日本国家の成立(考古学)や日本中世史の定説に対する、関西の視点を活かした書き換え、フィールドワークを重視する中国史など、**現場感覚に根ざした歴史研究**。
- **「大阪大学歴史教育研究会」などを通じた、歴史教育刷新の取り組み**→高校教育への働きかけだけでなく、大学の教養課程・専門課程、さらに大学院の授業改革まで：**①世界レベルで活躍できる研究者・社会人を育成するため、②良い教科書が書け入試問題が作れ教員養成ができる研究者＝大学教員を養成するための、目的を明確にした積み上げ式のカリキュラム(語学と外国語史料読解、個々のテーマの研究方法、発表と討論etc)と、きめ細かい履修指導による「再チャレンジ」「飛び越し」「はみ出し」などの奨励。**

## II わかる歴史、面白い歴史、役に立つ歴史

### 1. 歴史とは？

# (1) 暗記科目か？

- 一定の暗記が必要だが、多数の事実の中からパターンや傾向を読みとり **【「つなぐ力」と「くらべる力」が求められる】**、それに基づいて推論することも必要な点で、語学と似ている（化学や生物とも？）

——2007年1学期「市民のためのアジア史」小テスト例

- ①モンゴル帝国と現代アメリカ合衆国の共通点を説明せよ。[軍事を中心とする科学技術の先進性にもふれてほしい]
- ②辛亥革命(1911年)後の中国は領土、民族などの点でどんな国家になるべきだったか、当時の状況をふまえて、孫文になったつもりで考えよ。

## (2) 科学か？

- 「実験で再現できる客観法則がある」という条件は満たさない。しかし恣意的な解釈ゲームだけをしているわけではなく、立論の根拠を確認できるように明示しておく、一定の約束に従って用語や概念を使用するなど、少なくとも「間主観的」合意が成り立つ条件が定まっている点で、「学問」ではある。
- 唯一絶対の正解を求めるのではなく、複数の方法を適宜使い分けて事態（歴史理解）の改善をはかる点では、臨床医学や臨床心理学と似た面も。

## 2. 歴史教育は何の役に立つか？

### (1) 一般的効用

- 現在の社会は歴史の積み重ねの上に成り立ったものだから、歴史(とくに近現代史)を学ぶことで、現在を理解し未来を展望する力が身に付く。[歴史の変化する面がこれを要求する]
- 過去の人類のさまざまな成功や失敗の教訓に学ぶことで、よりよい生き方、よりよい社会が可能になる。[歴史の変わらぬ面、繰り返す面がこれを要求する]
- 「過去という他者」(外国史なら二重の意味で他者)を学ぶことで、他者理解や異文化コミュニケーションの能力が鍛えられる。
- 複数の資料を批判的に読んで事実を確定する訓練は、情報リテラシーの涵養につながる。
- 「時代」や「社会」などを研究することで、「長い目で見ると」訓練、巨視的な視野が身に付く。
- 「事実は小説より奇なり」→良質な娯楽や知的興奮の材料となる。

## (2) 歴史を知らないと(考えないと) どんな失敗をするか？

- 近年の「教育改革」のように、旧日本陸軍と同じやり方でデタラメな「戦争」をする：①指導部が大局的な戦略をもたないし無責任、②不十分な予算・補給で現場に突撃ばかり命じる。文句を言うと敢闘精神と工夫が足りないといふ非難する。③現場は勤勉だがワンパターンで金太郎飴的な戦いしかできない。
- 現在の(たまたまそうなっている)状況や仕組み、価値観などをずっと変わらないものと思い込んで、繁栄の裏に忍び寄る危機を見逃したり、逆に問題点を改革するチャンスを見送ることがある。[巨人中心の野球報道から学界や学問の仕組みまで]

- 現在の「先端技術を使いこなせる先進国の健常者」が当たり前だと思い込んで、その基準通り動けないハンディキャップのある人々や発展途上国の人々を理解できず、そういう人々を蔑視したり、無理を強いたりすることがよくある。  
[ODAからNGOまで]
- 悪意はなくとも、外国人やよその地方の出身者とのつき合いがうまくいかない場合がある。[第二次世界大戦や植民地支配の話だけではない]。
- 発展途上国でのカネがからんだ仕事で、ふっかけられて大損したり、善意でカネを払って現地社会に亀裂を生むことがきわめて多い。[貨幣経済が最近侵入するまでは、ずっと昔から自給自足で素朴に(地縁血縁に縛られて)生きてきた素朴な村人たち、などという非歴史的な虚像を信じてはいけない]

### (3) 歴史が養う論理的思考力

- 鎌倉幕府は「いつ」できたか→視点の問題
- 唐王朝の衰退は力が落ちたためか？→複数の力の合成
- 昔はみんなが早婚で、どの家も子たくさんだった？→必要な条件を想定する能力



### 3. 学ぶべきはどんな歴史か —世界史と日本史をつなぐ—

**例題:** もし江戸幕府が鎖国しなかったら、日本はどうなっていただろうか。その点から見て、鎖国にはどんな得失があっただろうか。「どの国も本来はヨーロッパ諸国と同じように発展するはずだ」という観念論でなく、17～18世紀アジアと世界の現実から考えよ。

# (1) アジアのなかの戦国日本 — 銀の奔流 —

- 1530年代に日本銀の輸出が開始され(石見銀山)、東アジアの貿易が爆発的に発展。1560年代にはこれに、スペイン領マニラなどを經由して流入する「メキシコ銀」が加わり、アジア海上貿易が全域で空前の繁栄。中国では通貨や税の、銅銭や米から銀中心への変化が急激に進む。
- \* 同時期のヨーロッパではアメリカ大陸からの金銀の流入を背景に「価格革命」「商業革命」「科学革命」などがはじまり、資本主義経済がひろがる。
- しかし室町幕府衰退後、日中間で公式の勘合貿易(朝貢ちょうこう貿易)ができないので、日中の海上勢力が混合した密貿易集団(後期倭寇)が大暴れ。ヨーロッパ人も利潤の大きい日中貿易につぎつぎ参入(日本側の最大の輸入品は生糸)。

# — 海禁かいきん体制の解体 —

- 明は倭寇鎮圧と並行して1570年代以後、民間の国際交流や貿易を禁止していた「**海禁**」を緩和し、中国商人の海外渡航を認めたが、日本行きは例外として禁止を解かず。そのうえ1590年代に豊臣秀吉が朝鮮侵略したため、日中間の国交・貿易再開は絶望的となる。
- 江戸初期にはその代わりに、第三国経由で日本に渡航する中国船、東南アジア・台湾に渡航して中国商人と取引する日本の**朱印船**、双方にパイプをもつポルトガル船やオランダ船などによって、大規模な日中貿易が維持されたうえ、日本と東南アジア・インドとの貿易もかなり発展し、東南アジアには日本町も出現

# —大航海時代がもたらしたもの—

- 明の海禁に代表される旧秩序が崩れるが、それは自由をもたらすいっぽうで、銀と銃砲の力により、かつての遊牧国家以上に強力な軍事＝商業政権を生み出す。
  - ヨーロッパ近代化の土台を築いた重商主義国家（絶対主義国家）群
  - 東アジアの満洲（清朝）、織豊政権
- 新大陸産の作物と病気が全世界に広がり、人々の暮らしを変える。

## (2) 世界史のなかの鎖国 —「17世紀の危機」—

- 1620-80年代にヨーロッパでは景気が後退、戦乱や環境危機も重なる。
- 東アジアでも1630年代から半世紀におよぶ動乱のなかで明から清に覇権が移る。
- オスマン帝国やムガル帝国も17世紀後半から衰退が始まる。

☆おそらく銀の過剰流通による通貨・物価の混乱と、人口増や商工業発展による森林破壊など共通の原因

# －日本の鎖国の実態－

- **1641年の鎖国完成後も長崎だけが窓口ではない：**  
薩摩～琉球～中国ルート、対馬～朝鮮ルート、蝦夷地～北方ルートと合わせ「4つの口」があった。
  - **長崎貿易の相手はだれか？**
    - －オランダ人(貿易高の1/3)：オランダ東インド会社(本拠地はインドネシアのバタヴィア)の各拠点との貿易[ヨーロッパとの直接貿易はごく一部で、アジア貿易の利潤をヨーロッパに送金する方が主]
    - －中国人(貿易高の2/3)：鎖国当初(中国は明清交替期の無政府状態)は鄭氏などの海賊集団と、東南アジア華僑。  
1683年以降は清朝が日本銅や海産物購入のために許可した特定の商人集団と、東南アジア華僑
- \* 長崎貿易の大半はアジア貿易**

# —鎖国の意図—

- 直接の意図はカトリック教国の侵略、カトリック教国同士の戦争に巻き込まれること、カトリック教国と結んだ西国の大名の反乱などの事態を防ぐこと。
- あわせて幕府による貿易の独占、通貨の統一管理など・・・清、朝鮮も共通した対外関係の強い国家管理（明の海禁の応用）。
- \* 当時の幕府は「国を閉ざす」とは考えていない。あくまで現実の情勢に対応した管理強化措置

# —「鎖国」の実体化—

- 17世紀後半から銀資源が枯渇、幕府は輸出品を銅や海産物に切り替えて、生糸・絹織物などの輸入を維持しようとするが、しだいに貿易規模が縮小（18世紀には人口比で最盛期の1／10程度）
- 18世紀後半から「開国」を求めるヨーロッパ諸国に対し、「鎖国は祖法である」として拒否  
→1850年代にようやく開国



# —もし鎖国していなかったら？—

- 当時の日本は軍事大国→200年早い「大日本帝国」が実現した可能性も
- しかし逆に、「17世紀の危機」の打撃を受けて混乱し、キリスト教国の植民地になった可能性・・・そのとき経済面で実権を握ったのは間違いなく華僑ネットワーク
- \* 鎖国により日本は世界的通貨危機の直撃を免れ、華僑ネットワークの進出も食い止めた！（もとの人口が少なかったため環境の限界は18世紀まで来ない）

# —鎖国のもとで実現したこと—

- 華僑ネットワークに牛耳られない独自の市場経済や金融メカニズム（中心は大阪）
- 貿易縮小を可能にした技術革新と輸入代替工業化（生糸、砂糖など）・・・これがなければ密輸が横行していた。
- 全国的に均質な文化や国民意識が発達
- 18世紀の人口抑制と環境保護

**#これらが幕末以降の急速な近代化の基盤**

# —鎖国の負の側面—

- 琉球(砂糖生産)、蝦夷地(漁業や狩猟)に対する「植民地支配」
- 日常的な国際交流がなくなり、現実的国際感覚が後退→中国が異民族(清朝)に支配されていることもかさなり、伝統的な中国(漢民族)へのコンプレックスが反転して、国民意識の独善的な部分(国学と神国思想)が強まる。

- **語学が苦手になる**

倭寇の時代にはバイリンガル、トリリンガルは当たり前だったのだが...

# (3) 17世紀の危機への対応が決めた 世界各地域の近代史

- ヨーロッパ: 植民地拡大で「前向きに」乗り切り工業化・近代化に成功
- インド洋、東南アジア海域など: 危機から立ち直れず徐々に植民地化
- 中国: 伝統的構造を変えずに立ち直り、華僑ネットワークが膨張。しかし18世紀には人口増加が止まらなくなる。
- 日本: 鎖国により危機の直撃を回避し、独自の近代化の基盤を形成

# —東アジアの18世紀の独自性—

- 対外交流や貿易に限らず、共通する管理・統制(ただし強まったのは村・家など下からの管理社会化か?)・・・日本が秀吉の朝鮮侵略を謝罪・朝貢しないままに朝鮮との国交回復や中国との貿易が認められるなど、柔軟な対処もおりませながら、それなりの安定→**その成果としての、各国共通の軍事力の弱体化**
- 日本・朝鮮・中国・ベトナム・タイなどで同時進行した伝統社会・文化の成熟→**良くも悪くも現代の国家・社会の基盤**

# ご静聴ありがとうございました



「ビネカ・トゥンガル・イカ」の言葉を鷲が掲げるインドネシアの国章(もともと密教とシヴァ信仰が同じ本質をもつことを主張した「それは二つにして一つである」という語で、現在は[多様性の中の統一]を意味すると解釈されている)